



負担の少ない「便潜血反応」検査

山口大学・山口県立大学名誉教授 江里 健輔 先生

令和6年9月17日、厚生労働省は全国の100歳以上の高齢者が15日時点で9万5,119人と発表しました。前年より2,980人増え54年連続で過去最多を更新し、女性が8万3,958人、男性1万1,161人でした。

平均寿命延伸の最大の原因は①医療技術の進歩による疾患の早期発見・早期治療が可能になったこと、②国民皆保険の整備、③食生活の向上、④生活環境の整備などです。2000年6月、ガン対策基本法が「全国どこでも質の高いガン治療が受けられ、安心して暮らせる環境づくり」のために制定されましたが、早期発見の最大手法である検診受診率は満足する状態に至っていません。国が検診を推奨する五つのガンの罹患率は、2020年では大腸15.6% (147,725人) が最も多く、次いで、肺ガン12.8%、胃ガン11.6%の順でした。

大便中に含まれる微量の血液を検出する「便潜血反応」検査が大腸ガン検診に用いられるようになり、早期発見・早期治療が著しく向上しました。ヒト・ヘモグロビンを検出する免疫学的方法是検査前に何らの食事制限を必要とせず、下部消化管からの出血を特異的に検出するので、被験者への負担は極めて軽微なため、検診が受けやすくなります。便潜血2回法で大腸ガンが見つかる確率は、進行ガンの約80~90%、早期ガンの約50%とされていますが、残念ながら、進行ガン (付図1) の10~20%、早期ガン (付図2) の50%は見落される可能性があります (wada.clinic>blood-test引用)。

従って、「便潜血反応」が陰性でも、便秘や下痢、腹痛や便が細いような症状があれば、再検査、あるいは、大腸内視鏡検査を受けることです。

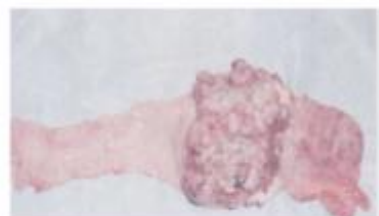
アメリカでは予防医学の観点から、45~75歳の国民に対し、無料または安価で年に一度の「便潜血反応」検査を、10年に一度は大腸内視鏡検査を受けるようにしたところ、罹患率が減少したと報告されています。

日本では、「便潜血反応」検査の対象者は40歳以上で、年1回検査を勧めています。この根拠はガンが早期である1cmの大きさになるには10~15年くらいかかりますが、1cmから2cmの大きさになるには1~2年と短いからです。進行すると、ガンが切除されても、術後、抗癌療法が必要で、患者さんの身体的、精神的負担が増えるだけでなく、経済的負担も増えてきます。

35歳以上の被保険者を対象とする生活習慣病予防健診にはこの「便潜血反応」検査も含まれています。

ガンを早期に発見できるチャンスであるにも関わらず、健診を受けないのは「賢くない」証拠です。

積極的に受けられることをお勧めします。



(付図1)
進行大腸ガン



(付図2)
早期S状結腸ガン

 **全国健康保険協会 山口支部**
協会けんぽ

協会けんぽ 山口支部

検索

〒754-8522

山口市小郡下郷312番地2 山本ビル第3

TEL: 083-974-0530 (代表)

受付: 平日8:30 ~ 17:15